

カナダ平原州の指導者 H・W・ウッドと アルバータ農民運動

田 中 俊 弘

はじめに

日本のカナダ史研究は、ケベック州を別にすれば、まだ地域史にじゅうぶん踏み込む段階に達していない⁽¹⁾。もちろん、外国研究としてのカナダ史では、国内の特定地域に視野を絞り込むその意義自体を問われるが、それにしても、西部史においてきわめて重要な役割を果たした事件や人物ですら、これまであまり取り上げられなかった事実は、カナダ史の総体的な理解を目指す際には重大な欠落となりうる。

本稿が扱う H・W・ウッド (Henry Wise Wood) は、アルバータ州史の枠を超えて、西部史における重要なアイコンである。平原州最大の都市カルガリー (アルバータ州) にあるグレンボウ博物館には、ウッドに焦点を当てた小コーナーが用意されているし、学界でも、たとえば、西部研究の第一人者ネルソン・ワイズマン (Nelson Wiseman) が、連邦議会 (国会) で活躍した政治家や州首相たちと並べて、初期の西部のイデオロギー的な潮流を代表する 1 人として彼を取り上げている⁽²⁾。日本でも、政治学者 C・B・マクファーン (Crawford Brough MacPherson) の古典、『カナダ政治の階級分析：アルバータの民主主義』が邦訳されており、主にその前半では、ウッドについて頁が割かれ、彼の集団統治理論が検証されているが⁽³⁾、それを除けば、彼は、研究者の間でもほとんど触れられない、知られざる存在である。

1905 年に州となったアルバータについて、その最初の半世紀の政治状況を

概観すると、農民運動の重要性が明らかである。そして、ウッドはその中心人物であった。1909年に誕生したアルバータ農民連合 (United Farmers of Alberta, UFA) は、その後、2つの世界大戦の狭間の時期 (戦間期) には政治に直接参入して、1921年から1935年には、州政権に就くまでに成長した。ウッドはその組織の会長を長期間務めた。政権には直接関与しなかったとはいえ、彼がこの一連の運動に与えた影響は計り知れない。会員からは、度々、首相就任を期待され、実際に要請もされたが、それを拒んだ彼は、「アルバータの無冠の王 (The Uncrowned King of Alberta) 」とも呼ばれる⁽⁴⁾。UFA 研究の第一人者である歴史家ブラッドフォード・レニー (Bradford James Rennie) の表現を借りれば、「やせこけた、リンカーン風の」ウッドは、「最も偉大な UFA 指導者であり、その誠実さと気取らないカリスマが、大衆の忠誠心を惹きつけていた」のだ⁽⁵⁾。

本稿は、彼が実際に農民の政治運動に与えた影響や運動内での彼の位置づけを、平原州史——とりわけアルバータ州史——の文脈から考察する。その際、先行研究にも依拠しながら、関連組織の機関紙やウッド自身の著述等を活用する。そこでは、ウッドの人物像の検証も重視しながら、彼の盟友ジョン・ブラウンリー (John E. Brownlee) が州首相となる1925年の前後——特に UFA 政権が誕生した1921年——までを中心に分析を行う。

1. 平原州の政治的特質

カナダ平原州とは、五大湖の北側に位置するオンタリオ州とロッキー山脈との間に挟まれた3州を指す。すなわち、1870年に創設されたマニトバ州と1905年に創設されたサスカチュワン、アルバータの2州であり、そこは、文字通り広大なプレーリーが続くカナダの穀倉地帯である。平原州では、中央から搾取され続けるカナダ経済の「辺境」との自己イメージも手伝って、独自の政治思想が育まれてきた⁽⁶⁾。

平原3州は、「中央」に対する反発を共通要素としながらも、それぞれに異なる政治的特徴を持つ。俯瞰的に述べれば、自由党 (Liberal Party) と保守党 (Conservative Party) という全国政党が州レベルでも力を維持したマニトバ州、1944年に北米で初の社会主義政党・協同連邦党 (Co-operative Commonwealth Federation, CCF) 社会主義政党として北米で初めて政権に就くなど、左翼的とみなされるサスカチュワン州、そして、UFA や社会信用党 (Social Credit) な

ど、全体主義的傾向を持ったその州独自の政権が続くアルバータ州という差異である⁽⁷⁾。また、アルバータ州の場合は、他州とは異なり、各々の政党・政治組織が長期間政権を維持してきた点も特徴的である。1905年の州創設から現在まで、政権交替が3度しか起こらず、自由党、UFA、社会信用党、進歩保守党の4つの長期政権が州政治を担ってきたのである。二党政治と多党政治の両方を拒絶することで、「無党制」へと発展した同州のシステムのユニークさに着目して、その分析を行ったのが前述のマクファーソンであった⁽⁸⁾。

そのような州毎の政治文化の差異については、いずれ稿を改めたいが⁽⁹⁾、平原州の政治思想を考える際に、ワイズマンによる次の議論は重要であろう。

…トリー主義や自由主義、社会主義などのあらゆる要素が、(平原)各州の異なる地方に違った配合で植えつけられた。こうした初期のイデオロギー的な潮流を代表する人物は、サー・ロドモンド・ロブリン (Sir Rodmond Roblin)、トーマス・A・クレラー (Thomas A. Crerar)、ジョン・ディーフェンベーカー (John Diefenbaker)、ヘンリー・ワイズ・ウッド、ウィリアム・エイバーハート (William Aberhart)、J・S・ウッズワース (James Shaver Woodsworth)、そしてトミー・ダグラス (“Tommy” Clement Douglas) と実に多様であり、その誰もがプレーリー出身ではなかった。これは何も驚くべきことではない。平原諸州の社会は、19世紀末から20世紀初頭に形成されたからである。平原諸州の思想とイデオロギーは、まずは旧社会からの輸入という形で出現したのである⁽¹⁰⁾。

平原地域の政治文化の差異を考える際に、1つの背景として、カナダ西部の初期のイデオロギーは、外国産の諸思想が、州毎に異なるバランスで根づいたという視点も必要なのだ。

2. 移民ウッド

本稿が扱うH・W・ウッドは、アメリカ中西部からの「輸入」であった。歴史家グラント・マクユーアン (Grant McEwan) は、「ミズーリ州が、新設のアルバータ州に果たした最大の貢献の1つは、ヘンリー・ワイズ・ウッドだった」と紹介している⁽¹¹⁾。彼はそう呼ばれるにふさわしい、優れた知見の持ち主であった。そして、アメリカ合衆国の農民運動を目にしてきた経験とそ

の反省が、アルバータでの運動に生かされた面もあったに違いない。アルバータ州は、ウッドと共にアメリカ農民運動の1つの潮流を——後に述べるように反例的に——受け取ったのだ。

ウッドは、1860年5月31日、南北戦争前のミズーリ州ロールズ郡でジョン (John Oliver Wood) とエリザベス (Elizabeth Broadley Wood) の第5子として生まれ、ヴァージニア州知事 (Henry A. Wise, 就任期間 1856-60) にちなんでその名がつけられた⁽¹²⁾。父ジョンはサウス・カロライナ出身で、1827年に家族に連れられてミズーリへと移住した。ジョンは、ケンタッキーからの移住者だったエリザベスと結婚して家庭をもち、いわゆるミズーリ妥協 (1820年) で奴隷州となっていた同州の北部で畜産場と農場の経営に成功した。彼は奴隷所有者であった。南北戦争では、周囲に北軍支持者が多い中、南軍に加わったが、南部の敗戦後も大きな経済的損失は受けなかったという。

その富裕な家庭ゆえに、ヘンリーは、当時の農家の息子としては珍しく、高等教育を受けた。2年間、ミズーリ州カントンのクリスチャン大学 (現カルヴァー・ストックトン・カレッジ) で学び、キリスト教の素養と信仰を深めると共に、そこで妻となるエッタ (Etta Leora Cook) とも出会った。

その後、父の跡を継いで畜産業と農場経営で成功した彼は、地元の教会でも積極的に役割を果たし、また農業・労働団体でも活動し、フリーメイソンにも所属した。「ウッドは、ミズーリ州で農民の運動が展開するのを間近に目にしており、後に農民の政治行動に対して反感を示した原因の多くは、この時期の経験に起因している」のだと歴史家ウィリアム・ロルフ (William Kirby Rolph) は説明している⁽¹³⁾。

1900年、すでに40歳となり、4人の子供の父親となっていた彼は、ミズーリの土地の高騰も手伝って、子供の将来のためにも、移住を考え始めた。そして、アルバータ州創設の年である1905年に、ホームステッドの土地がいまだに無料で手に入った「最後の最良の西部 (The Last Best West)」⁽¹⁴⁾へと移住する決意を固め、彼の一家は、アルバータ州カルガリーから50キロほど北のカーステアズに新しい居を構えた。

そして、移住後まもなく、ウッドは、カナダ平等協会 (Canadian Society of Equity) に参加し、その重要なメンバーとなる。それは、アメリカ平等協会の影響を受けて、1902年にエドモントンで誕生した組織であり、アルバータの農民運動組織の走りであった⁽¹⁵⁾。なお、この協会は、難産の末に他の同種の

組織と合併して、1909年にアルバータ農民連合へと生まれ変わった。

3. ウッドとカナダ農民運動

そもそも、カナダの農民運動の大きな流れは、19世紀末の連邦政府（保守党政権）による——保護関税政策を柱とした——いわゆる「ナショナル・ポリシー」への反発が、1つの契機となった⁽¹⁶⁾。高関税政策は、製造業者には好都合だったが、農民にとっては、結果として、より高価な農業機械や肥料を用いての生産を強いられ、しかも、農産品の輸出も不利になる「悪政」であった。オンタリオからアルバータまでの4州の様々な農民運動団体の役員からなり、その当時、すでに65,000名の農民を代表していたカナダ農業評議会（The Canadian Council of Agriculture）は、1916年12月に「農民綱領（Farmers' Platform）」を採択したが、その綱領が、東部製造業等の反対でウィルフリッド・ローリエ（Wilfrid Laurier）自由党政権を解散に追い込み、ご破算となった1911年加米互惠関税の受諾要請を含めて、関税問題に焦点を当てたことから、彼らの運動の方向性が明らかであろう⁽¹⁷⁾。

農民達には自衛が必要だった。穀物生産者の利害に沿って鉄道運賃や穀物エレベーター（穀揚機）の管理運営を行うべく、1901年に準州穀物生産者組合（Territorial Grain Growers' Association）が誕生し、その2年後にはマニトバ穀物生産者組合（Manitoba Grain Growers' Association）が誕生したのを皮切りに、時に州の枠組みを超えた複数の類似組織が、お互いの活動で協力や対立をしながら、大きな農民運動の潮流を生み出した⁽¹⁸⁾。1909年のアルバータ農民連合の誕生も、その流れに位置づけられる。

UFAが誕生する前年に、ウッドは、アメリカの商業利権の非道徳的な行動を糾弾した『金の亡者（Money Hunger）』を上梓している。人々を道徳的に教育する機関としての教会や学校などの重要性を説くその内容に、際立った特徴は見られないが⁽¹⁹⁾、商業利害に反発し、農民の民主主義教育を重視し、また、金銭面で極めて禁欲的だった彼の原点を見ることができる。その洞察力や情熱、組織運営能力などと共に、清廉さと無私の心が、ウッドの重要な特徴であった⁽²⁰⁾。彼は、UFAの会長となった際、他の指導者たちが年額2万ドル以上の手当を受け取る中、その10分の1の給与に満足したし、アルバータ小麦プールの会長を兼任した際は、そちらからは給与等を受け取らなかった⁽²¹⁾。

アルバータ農民連合は、順調に滑り出した。『穀物生産者の手引き (Grain Growers' Guide)』は、船出から約半年後の同団体について、「どんなに悲観的な人でさえも、この期間に UFA がその存在の正当性を示した点と、統合が成功だった点を認めるに違いない」と称賛した⁽²²⁾。出発時点では 2,000 名の会員だった組織が、1919 年には 25,000 名を有するようになった。また、1915 年には婦人組織も設立され、これも 1919 年の時点で 3,000 名の会員を抱えるに至った⁽²³⁾。

その組織の特徴は、支部 (Local) に大きな権限を与えるところにあった⁽²⁴⁾。会員は、10 名以上集まれば、自分たちで支部を作ることが認められた。そして、これらの支部毎に、本部への決議案提出が許された。つまり、各会員が、自分の支部を通して UFA の方針の策定に関与できたのである。それら決議案を審議する年次大会は、会員にとって重要な意味を持ったが、それも支部の規模に応じて、出せる代表の数が決められた。また、各支部は、一種のコミュニティ・センターとして機能することも期待されたし、協同購入なども、それぞれが支部単位で自発的に自由に行うべきだとされた。後に述べるとおり、これらの支部は、UFA が政治介入した際にも重要なユニットとなった。

ウッドがアルバータ農民連合内で重用されるようになり、ついには会長に就任する時期に、カナダは第一次世界大戦に参入していた。1914 年に理事 (Director) となった彼の身の上に、変化は急激に起きた。まず、UFA 会長だった W・J・トレジラス (William John Tregillus) が、1914 年 11 月 12 日にチフスで亡くなった。ウッドも出馬した会長戦では、ジェームズ・スピークマン (James Speakman) が勝利を収めたが⁽²⁵⁾、彼の下でウッドも副会長の 1 人に指名されている。さらに、翌年 12 月 21 日に、そのスピークマンも肺炎で急死すると⁽²⁶⁾、ウッドは会長代行を経て、1916 年に会長に就任した。

急速に拡大する、しかし同時に意見の分裂が加速した難しい時期のアルバータ農民連合を、ウッドは会長として支えた。特に、UFA が政党となるべきかどうか、当時の会員を二分するテーマになっていた。スピークマン前会長と同様に、ウッドは政党化を否定するスタンスを採ったが、それでも政治介入自体を止めることはできなかった。彼の下で、彼の理論を規範として、数年後に UFA 政権が動き出すのである。

4. ウッドと政治の距離

既に第一次大戦中から、ウッドの手腕には、連邦政府も注目していた。徴兵制導入をめぐる西部地域の言質を取り付けたかったロバート・ボーデン (Robert Laird Borden) 保守党政府は、連合 (ユニオン) 内閣の組閣に向けて動いた。そして、1917年には、後に進歩党を率いるトマス・クレラーと共にウッドにも閣僚入りを打診した。おそらくボーデンは、当初、クレラー (当時は穀物生産者連合 [United Grain Growers] 会長) を内相として、そしてウッドを農相として入閣させる方針を検討したと見られるが、具体的なポスト提示があったかどうかは不明である⁽²⁷⁾。結果は、ウッドはアルバータ農民連合会長に留まる道を選び、クレラーが農相となった。後にUFAに吸収されるアルバータ無党派連合の機関紙『アルバータ・ノン=パルチザン (Alberta Non-Partisan)』紙は、ウッドの行動を讃えて、「彼はおそらくアルバータで最も有能で傑出した指導者であろう。同胞労働者たちの社会・経済的な立場を完全に把握し、個人の利益よりも原則と徳性を優先する人物なのだ」と述べつつ、ボーデン政府への批判を強めた⁽²⁸⁾。

ウッドが閣僚入りしなかったのは、アルバータの農民の多くにとって、好ましい選択であった。後にも州首相の座を拒み続けた「無冠の王」は、政治とは常に一定の距離を保ちながらも、「その時期の (アルバータ) 州における農民運動の政治的・経済的側面に比類なき影響を及ぼした」のである⁽²⁹⁾。

彼の社会理論を、マクファーソンは次のように要約している。

...この競争の激しい経済社会では大衆と支配階級との利害の対立が激化すること、大衆が職業組合を作って自らの組織を固めるに従ってこの対立がさらに目立つようになること、そしてその対立が爆発点に達して支配階級が敗北すると、競争社会が消滅し調和のある協同組合社会が出現するというものだった⁽³⁰⁾。

ウッドも、支配階級の打倒を目指した。そして、「協同」の概念を大事にした⁽³¹⁾。おそらくそれは、19世紀末にヨーロッパから入ってきた、協同連邦 (Co-operative Commonwealth) の考え、すなわち、アメリカ合衆国の社会主義者ローレンス・グロンランド (Laurence Gronlund) が掲げた、「産業面・政治面・社会面での現象が、完全に自然な方法で、『新社会秩序 (New Social Order)』

——社会主義的かつ民主主義的な秩序で、私が『協同連邦』と呼ぶもの——に進化していく」という理想を少なくとも一部は共有していた⁽³²⁾。

彼に、政治そのものに対する不信感があったのは間違いない。自由党と保守党という既存政党に対する幻滅は、ウッドに限らず、当時の西部に蔓延していた。彼も、1919年の年次大会において、それまで州政権を担ってきた自由党の綱領はおそらくこれまでと変わらないが、自分たちは、それをもはや支持できないと論じた⁽³³⁾。

それならば、UFA が自ら政治化するしかないとの意見が出てくるのは、むしろ自然であった。もはや議論は、新しい政党を立ち上げるのか、それとも違う形で政治介入をするのかに移っていた。実際に、1919年は、この組織が政治化を進める画期となった。同年1月の年次大会で、彼らは、「この(政治行動の)必要性を述べ、それぞれの連邦選挙区において、その境界内の UFA 地方組織が、それがどんな政治行動であれ、自分たちに合うと判断した行動がとれる余地を残す」という決議を承認したのである⁽³⁴⁾。ウッドも、政治介入がやむを得ないのは理解していた。歴史家カール・ベトケ (Carl Betke) によれば、「彼は、もはや農民達の政治への情熱が止められないことに気づくと、1919年以降は、彼らの政治介入を最小限にするべくデザインされた哲学に基づいて、彼はレトリック上のサポートを仕方なく行った」のだ⁽³⁵⁾。

『アルバータ・ノン=パルチザン』紙の風刺画でも紹介された、「農民には2種類いる。農場から収益を得る農民と、農民から収益を得る農民である」という彼の発言は⁽³⁶⁾、その政治不信が決して払拭されないことを表していた。政治介入のサポートに転じたとはいえ、政党政治に対して常に懐疑的だったウッドは、農民が政党活動を行うことには、その後もずっと批判的だった。そこに彼の譲れない一線があった。

彼が UFA の政党化に反対した理由を、先にも触れたとおり、歴史家は、アメリカ中西部の農民運動が政治化して失敗するのを見てきた経験に見いだしている。W・L・モートン (William Lewis Morton) は、「アメリカでの経験の結果という以上に、UFA が政治的に失敗することを彼が恐れた簡潔な説明ができる余地はない」と述べ、「農民団体が政治に参入する危険と、農民と労働者が連合することで生じる問題は、カナダの農民運動に繰り返される光景であったので、彼のスピーチや文章にも繰り返されるテーマになった」と論じた⁽³⁷⁾。

そんな「政治嫌い」のウッドが、次節で述べる集団統治理論を提示して、政権の後ろ盾となったのは、一種の歴史的な皮肉であった。

1919年5月末に州内のマクリードという町で開催された会合では、彼は、アルバータ農民連合が純粋性を保つべきだと強調しながら、真の (bona fide) 農民以外に対する門戸を閉ざすよう主張した⁽³⁸⁾。それは、「新しい運動を支援したがっている正直な民主主義者の眼前で、政治の扉を閉ざす」行為として、無党派連合のウィリアム・アーヴァイン (William Irvine) から反論を受けたが⁽³⁹⁾、ウッドの考えに従って、UFAは純粋に農民のための組織とする案が採択された。

農民からなる農民のための組織は、ウッドの理想であった。しかし、実はこの時の事情は、単純な「労働者外し」ではなかった。無党派連合の約10,000名の会員のうち、95%前後がUFA会員でもあり、しかも、彼らは組織内の積極行動派 (ジンジャー・グループ) として機能したからである⁽⁴⁰⁾。この議論の後も、彼らの大多数が、UFAに残り、ウッドらと対峙して、独自政党の設立を主張した。彼の反対にもかかわらず、UFAは、そんな彼らの要請に部分的に応えて、UFA政治同盟 (UFA Political League、後にUFA政治協会 [UFA Political Association] と改称) を設置し、この組織に各支部の調整を行う役割が付与された⁽⁴¹⁾。それは、下手をすればUFAの政党化につながりうる組織であった。設置後、この協会は、ウッドとの対立姿勢を強めていくのである。

本心を言えば、ウッドはこの段階でも、UFAを政治に参入させず、農民の経済的な利益団体のままで留めたかったに違いない。しかしそれが不可能な今、次節で示すように、せめて、農民政党ではなく、農民が、純粋に農民の利益のために政治に働きかけられる組織を作ろうとしたのである。

5. ウッドの政治理論：進歩党とUFAへの対応

ウッドは、アルバータ農民連合が政治活動へと介入していく1919年の前年に、集団統治理論を提示していた。政党政治を拒んだ彼が編み出した集団統治理論とは、再びマクファーソンの要約に頼れば、「職業集団、産業集団、または経済階級 (ウッドの用語) ごとの組織が政党にとって代わり、各々の組織がグループの利益を代表して議会に送る代表を選ぶ」制度であった⁽⁴²⁾。組織化された政治集団による集団統治と政党制度の違いについて、ウッド自身は、困惑する会員に対して、次のように説明した。

…この（集団統治）制度を通じて、市民は…自らの政治機構を動かすことになる。彼らは指名大会に出席して自分の代表を選び、それぞれの代表が、ある程度決まった数の市民を代表する。そして、自分を選んだ人以外の誰に対しても責任を持たず、誰からも影響を受けない代表が、候補者の指名を含めて、大会の仕事を実行するのだ。

こうして候補者が指名されると、その候補者に資金協力をし、選挙運動を実行するのは、指名を始めた市民の責任となる。これは純粋に民主的なプロセスであり、それは、体系的な組織を通さずには、政治的に実行不可能である。

（他方、）政党は組織ではない。もし農民達が、単純な農民の政党を開始し、単純な農民の綱領を採用するのであれば、彼らは民主主義に則ることができない。なぜなら、政党の構造では、民主的な政治行動を実行できないからである。人々がボトムアップでシステムティックに動くような組織化された政治行動を断念するのは、民主主義を諦めることである。執行部に導かれる政党へと走るのは、個人主義や政治的独裁へと走ることなのだ。⁽⁴³⁾

政党を組織とみなさない彼のレトリックを正しく理解するのはむずかしいが、少なくともウッドの集団統治の理念は明確であろう。党に指名された候補者が党員が支援するのではなく、自分たちが候補者を選ぶところから始めるのが、集団統治の原則なのだ。そして、従来から重視された支部が、この体制を動かす重要な活動主体であった。

しかし、旧制度を捨てて新しい取り組みを行うのは簡単ではない。ここでも、制度の理念と現実への適応をめぐる相当の混乱が見られた。アルバータ農民連合が政治化する出発点となった 1919 年の年次大会では、UFA の地方支部が地区候補者をノミネートし、選ぶ機関とする決定が行われたが、1925 年大会では、選ばれた候補者が公的な立場では誰を代表するのか、また、他の選出メンバーとどのような協力が期待されるのか、あるいは、支部の自治の範囲がどこまで及ぶのかといった点で混乱があったとして、詳細についての議論が行われた⁽⁴⁴⁾。そして、（1）候補者は UFA のみの代表であるべきだとし、（2）個人として他の UFA メンバーと協力が期待されるが、（3）以

上の2項目の条件を満たせば、各支部に完全な自治が認められる等、計8項目が宣言された。

そうした混乱とは別に、先に触れたUFA政治同盟(政治協会)の設置などに見られる、アルバータ農民連合の幹部同士の綱引きも、この集団統治を分かりにくく、さらには実現困難にした。

とはいえ、第一次世界大戦後、特に1919年以降のアルバータ州農民運動の政治化は、他州の組織との連携もあって、大きな実を結んだ。1921年は、特に重要な変化の年であった。連邦政治レベルでは、UFAを含む農民運動を支持基盤とした進歩党が65議席を得て、自由党に次ぐ第二勢力となった。そして州レベルでは、UFAが政権を獲得したのである。

しかし、進歩党においては、ウッドは党首のクレラーと真っ向から対立した⁽⁴⁵⁾。州内でも政党制度を否定した彼は、進歩党を様々な「経済階級」の利害を巻き込んだ政党として捉える考えとは相容れなかった⁽⁴⁶⁾。クレラーらの自由党に対するアプローチも不信の種だった。農民運動にこだわって、進歩党を分裂に陥れ、衰弱させた過激派のイメージが付与されてきたウッドであるが、彼には、そこから撤退するより他に選択肢がなかったのである。

他方、アルバータ農民連合においては、彼は政治との距離をうまく取り、影響力を維持できた。もちろん、対立はあった。地方支部を重視したボトムアップの民主主義と言いながら、議員に対する支配権は内閣に奪われてしまったし、各地区の重要性も蝕まれていった⁽⁴⁷⁾。これらはウッドにしてみれば、政治的な敗北だったに違いない。

それにもかかわらず、会長職を1931年に辞するまで、ウッドはUFAの支柱であり続けた。アルバータ農民連合政権は、当選した議員団が話し合って州首相を決めるスタイルを取ったが、UFAの初代首相H・W・グリーンフィールド(Herbert W. Greenfield)は、議員団の要請を断り、しかし、その後のウッドの説得を受けて、ようやくその座についた⁽⁴⁸⁾。そして二代目首相のブラウンリーも同様であった。

1921年から始まるUFA政権は、いびつな政治体制であった。アルバータ農民連合は61議席中38議席を獲得して、15議席の前政権党・自由党を大きく上回ったが、獲得票数で比べれば、自由党に及ばなかった⁽⁴⁹⁾。また、実際のところ、UFAは州内の地方のみを代表し、二大都市のエドモントンとカルガリーから選出されたUFA議員は、政権期間中を通して、わずか1名しかい

なかった。集団統治は妥協を強いられ、農民という「経済階級」が計らずも独占的になった州議会において、しかも都市部の代表を抱えずに、安定した政権運営をするのは困難であった。その上、UFA の議員達は政治の素人ばかりでもあった。一連の運動と UFA 政権を振り返って、政治学者ジョン・コンウェイ (John F. Conway) は、次のように論じている。

運動内のイデオロギー一面での分裂やその計画の曖昧さ、労働者に対するアンビバレントな感情、農業を以前の傑出した状態に戻すという決して実現できそうにない目標設定などが、この農民達の組織的な運動の未来を初めから運命づけていた⁽⁵⁰⁾。

確かに、初めから勝ち目のない戦いであった。また、世界恐慌は、アルバータ州に限らず、カナダ中の政権党に大きなダメージを与え、UFA の場合には、ウッドの盟友だったブラウンリー首相のスキャンダルも政権に悪影響を及ぼした⁽⁵¹⁾。1935 年の州選挙で、社会信用党に政権を明け渡したばかりではなく、前政権党が全ての議席を失うという、これ以上ありえないほどの大敗北で UFA の時代は幕を閉じた⁽⁵²⁾。

しかし、歴史として振り返る際に、彼らの運動は、単なる失敗として扱われるべきであろうか。あるいは、UFA が政党化していれば、運動は「成功」したのだろうか。短命に終わった進歩党や他州の農民連合政権に比べて、UFA は、少なくとも一時代を築くことに成功した。政策的にも、たとえば、ブラウンリー政権は、平原州では連邦政府が握っていた天然資源の管理権限を州に引き渡させる天然資源委譲法の成立に寄与した⁽⁵³⁾。農業の時代が終わろうとしていたが、UFA 政権はその最後の時期に、重要な努力と貢献をしたのである。

マクファーソンは、アルバータ農民連合の政治思想的な遺産について、「一瞥すると (その政治原則が) ほとんど何も残っていないように見える」と述べつつも、実際にはそれがある程度実施されていたとして、「州民が代議制民主主義に代わって得たものは大衆直接参加制、あるいは国民投票制の民主主義だった」と論じた⁽⁵⁴⁾。今日に至るアルバータの政治文化を UFA の遺産とみなす議論には異論もあるだろう。しかし少なくとも、戦間期の限られた期間には、UFA は政権と経済組織の両面で、州内の多くの農民の拠り所だった

し、その中心にいたウッドも、同様に彼らの拠り所であった。

むすび

アルバータ州内を旅すると、UFAの看板をしばしば見かける。おそらく、現代に生きる者の多くにとって、UFAとは、単にガス・バー（ガソリン・スタンド）や生協であって、それが州政権を担ったことは、すでに遠い記憶にすぎないのだろう。しかし、平原州史を理解する上で、政治活動から降りた1939年以前の、政治組織としてのUFAの存在を無視することはできない。その中でも特に大きな役割を果たしたH・W・ウッドは、重要な研究対象である。発展期を会長として支えた彼は、組織の政党化に批判的であったが、妥協の末に考えた集団統治理論を、部分的にはあれ、実践させた。また、政権が誕生した後は、州首相と連携を取りながら、それを支えた。研究者は、UFA政権の限界に目を向けがちであるし、そのような限界があったのは明らかだが、アルバータでは、そのような困難を抱えた政治組織が長期政権を維持した点に着目する必要がある、ウッドの存在と彼の一貫性も、それに寄与していたのだ。

彼の思想は、アメリカでの経験に影響を受けたに違いない。また、キリスト教の信仰も、その行動規範になっていた。本論では簡潔に触れたのみであるが、「協同」という概念も、彼を理解する際に重要であろう。その意味で、同じ西部人であり、キリスト教の深い信仰を持ち、後に誕生するCCFの初代党首として活躍した社会主義者J・S・ウッズワースとも多くの共通項があり、彼らを当時の西部知識人の1類型として扱えそうである。

ウッドは、時代の対立軸の中心にいた。カナダ平原州の農民運動の歴史は、乱立と統合と分裂、あるいは対立と妥協の繰り返しであり、多様な組織が誕生して姿を消す混沌であったが、彼の人生を辿ることで、その混沌の状況を——少なくともアルバータ州については——理解する一助となる。UFA、カナダ農業評議会、進歩党、アルバータ小麦プールなど、平原州の諸組織に重要な立場で関与した彼は、まさに「無冠の王」であった。彼のその時々々の行動や発言だけを取り上げれば、ウッドは、過激な農民運動家で、政治の黒幕であるかのような印象すら受けるが、現実には、むしろ無私で民主的な人物であり、だからこそ、農民の熱い支持を得られたのである。

なお、この人物についての研究で、現段階では、まだまだ積み残した課題

も多い。ウッドのもう 1 つの顔であるアルバータ小麦プールの会長としての活動は、その重要性にもかかわらず、時間的な制約と本稿の構成上の都合から、省かざるを得なかった。しかし、「農民が、自分の小麦について、自分のやり方での売買をする」ための小麦プールには、彼自身も大いに情熱を注いだのだ⁽⁵⁵⁾。アルバータ州の教育副大臣だった T・C・バーン (Timothy Clarke Byrne) が主張するように、UFA が州農民に果たした福利上の最大の貢献は小麦プールであり、その成功が、むしろ UFA の政治力を削いだ側面もあるだろう⁽⁵⁶⁾。また、彼と進歩党との関係、カナダ農業評議会会長としての貢献、あるいは CCF に対する評価なども、さらに掘り下げる意義がある。本論でも登場した多様な組織に対するスタンスについても、整理しなければならない。本稿は、これまで日本でかろうじて紹介されてきた「集団統治理論の政治思想家」と「進歩党でクレラーと対立した活動家」という以外の側面にも踏み込み、彼の人物像とその農民運動を、時代の文脈で検証したところまでに留め、その他は今後の課題としたい。

注

1. 数少ない地域史の試みとしては、木村和男、ダグラス・フランシス編著『カナダの地域と民族』同文館、1993 年がある。カナダにおける特別な地域として関心を集めてきたケベック史については、竹中豊に代表される諸研究がある。また、日系人史など、一部のテーマが特定地域史と結びついて展開しているものの、特に平原州史については、重要な事件や人物すらいまだに十分に取り上げられていない段階である。
2. Nelson Wiseman, *In Search of Canadian Political Culture*, (Vancouver: UBC Press, 2007), 213. 彼は、2010 年のコンフェレンス・ペーパーでも、「1920 年代における彼 (ウッド) のアルバータ政治の支配力は、30 年代のエイバーハート (社会信用党) のそれをも凌いだ」と、政治の表舞台には立たなかったウッドを、1935 年以降の州首相となったカリスマ的人物と比較して、高く評価している。Wiseman, “The American Imprint on Alberta Politics,” (Prepared for the Annual Meeting of the Canadian Political Science Association, June 2, 2010), 5.
3. C・B・マクファーソン著・竹本徹訳『カナダ政治の階級分析：アルバータ

- の民主主義 (Democracy in Alberta)』御茶の水書房、1990年。ウッドについては、特に2章と3章、35-90頁。原著はオックスフォード大学出版会から1962年に刊行。同書は主に1935年以降の社会信用党政権の分析に焦点を当てており、その対比もしくは前座としてUFAを分析している。なお、マクファーソン理論への批判については次を参照のこと。Leslie A. Pal, “The Political Executive and Political Leadership in Alberta,” Allan Tupper ed., *Government and Politics in Alberta*, (Edmonton: University of Alberta Press, 1992), 1-2.
4. William Kirby Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta*, (Toronto: University of Toronto Press, 1950), 170; T.C. Byrne, *Alberta's Revolutionary Leaders*, (Calgary: Detselig Enterprises, 1991), 39.
 5. Bradford James Rennie, *The Rise of Agrarian Democracy: The United Farmers and Farm Women of Alberta 1909-1921*, (Toronto: University of Toronto Press, 2000), 11.
 6. 田中俊弘・加藤普章「西部カナダ——平原3州とBC州」日本カナダ学会編『はじめて出会うカナダ』有斐閣、2009年、247-55頁；田中俊弘「西部カナダの展開：西部の地域主義と『連邦参加』」飯野正子・竹中豊編著『現代カナダを知る57章』明石書店、2010年、357-60頁参照。
 7. ただし、イデオロギー的には対照的な政党とみなされるCCFと社会信用党の実質上の差異は少なかったというのが最近の論調である。たとえば、コンウェイは、アルバータとサスカチュワンで政権に就いた両党の政策面での類似性は驚くほどであり、「どちらも組織化された農民のポピュリズム改革運動を根に持ち、また、どちらも進歩党が躍進した遺産を共有している」のだと論じる。J.F. Conway, “The Prairie Agrarian Movement: Beginnings to World War II,” *Prairie Forum*, 29 (2), Fall, 2004, 167.
 8. マクファーソン『カナダ政治の階級分析』204-5頁。
 9. 田中俊弘「(研究ノート)西部カナダ研究の視点」『麗澤レビュー』13号(麗澤大学英米文化研究会、2007年5月)、122-31頁において、多少の枠組みは提示した。
 10. Wiseman, *In Search of Canadian Political Culture*, 213. ロブリンはマニトバ州首相(自由党、就任期間1900-15年)、クレラーは進歩党党首(第一次世界大戦中にオタワのボーデン連合政府で農相、後に自由党連邦政府で内相や

- 農相などを歴任)、ディーフェンベーカーは連邦首相(保守党、就任期間 1957-63 年)、エイバーハートはアルバータ州首相(社会信用党、1935-43 年)、ウッズワースは社会主義政党・協同連邦党(CCF)党首、ダグラスも同じく CCF メンバーで、サスカチュワン州首相(就任期間、1944-61 年)。ウッドを除き、いずれもカナダ平原州を代表する「政治家」である。
11. Grant MacEwan, *Fifty Mighty Men*, (Vancouver: Greystone Books, 1995), 60.
 12. 以下、アルバータ州に移住するまでの経緯については、主に、Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta*, 7-13; Byrne, *Alberta's Revolutionary Leaders*, 27-29 などを参照した。
 13. Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta*, 11. ウッドは、尊敬していた農民運動の指導者ウリエル・ホール(Uriel S. Hall)が、連邦議員就任後まもなく変節したことに大きなショックを受けたという。Ibid., 12.
 14. 「最後の最良の西部」は世紀転換期のカナダ政府が移民募集に用いたフレーズ。アメリカ西部の定住が進んだことで、カナダの平原州が、新しい移民にとっての移住目的地となった。R. Douglas Francis, Richard Jones, and Donald B. Smith, *Journeys: A History of Canada, 2nd Edition*, (Toronto: Nelson Education, 2010), 292.
 15. Tom Monto, *The United Farmers of Alberta--a movement, a government*, (Edmonton: Crang Publishing, 1989), 2nd page. UFA 研究の重要な先行研究の一つとしてしばしば取り上げられるこの 60 頁弱の小冊子に頁番号は振られていない。
 16. 木村和男編著『新版世界各国史 23 カナダ史』山川出版社、194-95 頁。
 17. University of Alberta, Bruce Peel's Special Collection [以下、Peel] Item 4377: "The Farmers' Platform," drafted by The Canadian Council of Agriculture and adopted by the United Farmers of Alberta, the Saskatchewan Grain Growers' Association, the Manitoba Grain Growers' Association and the United Farmers of Ontario, (Winnipeg: The Canadian Council of Agriculture, 1918), 3 ; 加米互惠関税については、木村和男『新版世界各国史 23 カナダ史』237-38 頁。なお、ウッドは、他の組織での役職との兼務で、この評議会の会長も務めた。
 18. "Grain Growers' Associations," *The Canadian Encyclopedia Online*, <<http://www.thecanadianencyclopedia.com/>> (2011 年 3 月 28 日閲覧) . 1901 年

- 当時、まだアルバータ及びサスカチュワン州は創設されておらず、北西準州 (Northwest Territories) の一部であった。準州組合は、その後分裂してアルバータでは、アルバータ農民組合 (Alberta Farmers' Association) となり、さらにそれがアルバータ平等協会と合併して 1909 年に UFA になる。
19. H.W. Wood, *Money Hunger: A Brief Study of Commercial Immorality in the United States*, (New York: The Knickerbocker Press, 1908), 14 等。
 20. Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta*, 4-7.
 21. *Ibid.*, 6.
 22. "The UFA For Six Months," *The Grain Growers' Guide*, August 7, 1909.
 23. Peel 4540: "How to Organize and Carry on a Local of the United Farmers of Alberta," (Calgary: Office of the Province Secretary, UFA, 1919), 29.
 24. *Ibid.*, 3; Byrne, *Alberta's Revolutionary Leaders*, 29-30.
 25. "U.F.A. Directors Meet," *The Grain Growers' Guide*, January 27, 1915; "U.F.A. Convention Proceedings," *Ibid.*; "W. J. Tregillus," *Dictionary of Canadian Biography Online*, <<http://www.biographi.ca>> (2011年3月28日閲覧)。
 26. "James Speakman," *Dictionary of Canadian Biography Online*, <<http://www.biographi.ca>> (2011年3月28日閲覧)。
 27. W.L. Morton, "The Social Philosophy of Henry Wise Wood, The Canadian Agrarian Leader" *Agricultural History*, 22 (2), April, 1948, 115 ; Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta*, 57-58.
 28. "President Wood and the Union Government," *Alberta Non-Partisan*, October 26, 1917. 同紙はアーヴァインが設立した労働者団体アルバータ無党派連合の機関紙。以前から UFA とは友好関係にあったが、後に述べるように、ウッドが農民以外を同組織から外す発言をした 1919 年 5 月の大会を経て、正式に UFA に加わった ("Alberta Farmers' Hold," *Grain Growers' Guide*, June 25, 1919)。なお、「パルチザン」が日本語として定着しているので、原音とは異なる仮名を訳語に当てた。
 29. Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta*, 3.
 30. マクファーソン『カナダ政治の階級分析』27頁。
 31. "Advocates Establishing Democratic Government As Welcome To Our Heroes," *Alberta Non-Partisan*, Nov. 6, 1918; Rennie, *The Rise of Agrarian Democracy*, 208.

32. Laurence Gronlund, *The Co-operative Commonwealth: An Exposition of Modern Socialism*, (Boston: Lee and Shepard Publishers, 1884), 7. グロンランドはデンマーク生まれのアメリカの社会主義者である。ウッドは「民主主義」と「協同」を度々口にしたが、協同連邦党 (CCF) に対しては、「グループ統治」の考えを受け入れない、進歩党に近い政党とみなし、懐疑の念を抱いていた。Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta*, 215.
33. "U.F.A. Political Convention," *Alberta Non-Partisan*, June 19, 1919.
34. "Political Action By The U.F.A.," *Alberta Non-Partisan*, Jan 30, 1919.
35. Carl Betke, "The UFA: Visions of a Co-operative Commonwealth," *Alberta History*, 27 (3), Summer, 1979, 7.
36. "True Words—Never Spoken," *Alberta Non-Partisan*, June 21, 1918.
37. Morton, "The Social Philosophy of Henry Wise Wood," 118, 120.
38. "Alberta Farmers' Hold," *Grain Growers' Guide*, June 25, 1919; "U.F.A. Political Convention," *Alberta Non-Partisan*, June 6 & June 19, 1919.
39. "U.F.A. Political Convention," *Alberta Non-Partisan*, June 19, 1919.
40. Monto, *The United Farmers of Alberta*, 20th page.
41. Ibid., 21st & 22nd pages.
42. マクファーソン『カナダ政治の階級分析』42頁。
43. Wood, "Shall We Go Forward Or Turn Back?" *The UFA*, September 1, 1922.
44. Peel 9930: "United Farmers of Alberta Convention (1925) . Declaration of principles unanimously adopted by the Annual Convention of the United Farmers of Alberta, January 23, 1925," (Calgary?: United Farmers of Alberta, 1925) .
45. 日本の学界では、政治理論を除けば、もっぱら、この進歩党内での対立においてのみ、ウッドについて言及される傾向がある。たとえば、柳原克行「カナダ連邦システムと地域主義」『立命館法学』2000年5号〔273号〕、2000年、2186〔366〕頁；木村和男『新版世界各国史 23 カナダ史』254頁。
46. Francis, Jones, and Smith, *Journeys*, 398.
47. マクファーソン『カナダ政治の階級分析』66-82頁。
48. 同上書、72-73頁。
49. *A Report on Alberta Elections, 1905-1982*, (Government Publication), 11. 州政府資料であるこの印刷物に出版地、年などの記載はないが、州選挙庁長官の手による序文には1983年12月の日付とアルバータ州エドモントンの地

名が添えられている。

50. Conway, “The Prairie Agrarian Movement,” 158.
51. 当時18才だったヴィヴィアン・マクミラン (Vivian MacMillan) を、政治的な立場を利用しての職業斡旋と引き換えに誘惑したとされる「ブラウンリー・スキャンダル」で、彼は1934年7月に首相の座を追われた。Franklin Foster, *John E. Brownlee: A Biography*, (Lloydminster, Alberta: Foster Learning Inc., 1981), 特に225-62.
52. *A Report on Alberta Elections, 1905-1982*, 13, 48-53.
53. John E. Brownlee, “The Transfer of Alberta’s Natural Resources,” (Interviewed by Una MacLean in 1961), *Alberta History*, 53 (4), Autumn, 2005, 17-23.
54. マクファーソン『カナダ政治の階級分析』89-90頁。
55. Peel 5213: “Pooling Alberta’s wheat,” (Calgary: Alberta Wheat Pool, 1928), 5.
56. Byrne, *Alberta’s Revolutionary Leaders*, 37.